

鈴木商店と関門コンビナート及び筑豊炭鉱事業 ～北九州各地に現存する鈴木商店の産業遺産～

2018. 12. 15
市原猛志

1. 門司の近代化

関門海峡を挟み本州と九州とを結ぶ地理的重要性から、源平合戦や戦国時代には歴史の舞台となる。中世の門司は下関の潮待港（田野浦など）、漁港などの機能を持っていた。現在の門司港周辺は塩田、明治初年の人口は僅か2719人。大里地区は本州からの参勤交代経路・宿場町として賑わうが、第二次長州征伐の時に戦場となる。

・筑港事業から国際貿易港へ

港湾としての優位性を指摘され、三角西港の設計者ムルドルや古市公威を中心とした内務省調査団を1887年に招き築港計画を策定。1889年に門司築港会社が設立、同年門司港は特別輸出港（石炭・米・麦・麦粉・硫黄の五品目のみ）に指定。三井物産や三菱合資、日本郵船や大阪商船など大手商社や海運会社も順次進出。

1889年に日本銀行の国内三番目の支店として西部支店が設置。1901年には鉄道を介した船溜への貨物輸送水陸連絡工事が完成するなど、港町としての金融・商業機能などの原型が出来上がる。

開港当初、門司港の輸出総額の約88%を占めていた（1900）石炭は、1910年代30%を割込み、積出高も減少。一方精糖やセメント、綿糸などの輸出は増加し、輸出品も多様化。原料綿・原料糖・小麦原料・肥料などが輸入され、九州の産業発展を支える。最盛期には計34航路もの国際定期船が門司に寄港。門司港は石炭積出港としての役割から総合的な国際貿易港へと変貌を遂げ、全盛期を迎えた。

2. 筑豊の産業と近代化

もともと穀倉地帯であった筑豊地域は、室町末期に石炭が発見されることとともに、当初は瀬戸内地域における製塩業の木材代替材として、近代に入るとエネルギー源として大規模な炭鉱が開発される。田川地域を中心として石灰石鉱山、そしてこれらを加工するための各種工場施設が建設され、また製品を輸送するために最初は煉瓦造橋梁を持った鉄道が整備され、また昭和に入ると舗装道路が順次市内に拡大し、工業製品を円滑に生産し続けるための各種インフラが、電気水道施設などを含め急速に整備されていった。

工業に携わる人びとが生活する上で、各種の必需品や嗜好品などを供給するために既存市街地に加わる形で飯塚・直方・田川の各地域で商店街が形成されていった。一般住宅の分野においても筑豊の炭鉱地帯への富の集中が進むとともに今現在観光資源となり得るような豪壮な炭鉱主住宅が建てられていった。炭鉱住宅も当初の納屋制度から近代的な長屋へと改善が図られていった。公共施設は民間施設の後を追う形で設備されていき、急激に流入する人口に対応するため、その業務を拡大させるとともに市町村合併を通じて広範囲な行政サービスを発展させていった。

3. 門司の近代化と鈴木商店

関門海峡は挟み本州と九州とを結ぶ地理的重要性から、源平合戦や戦国時代には歴史の舞台となる。中世の門司は下関の潮待港（田野浦など）、漁港などの機能を持っていた。現在の門司港周辺はかつての塩田で、明治初年の人口は僅か 2719 人。大里地区は本州からの参勤交代経路・宿場町として賑わうが、第二次長州征伐の時に戦場となった。

（1）大里地区と鈴木商店クロップロード

大里地区は明治に入ると門司港の整備に伴い、相対的に地位が低下。豊富な労働力と水資源、筑豊炭田への近さから官営製鐵所の最終候補地に選ばれるも、最終的には八幡に誘致が決定する。

鈴木商店の番頭・金子直吉は台湾で後藤新平の知遇を得ると、自社による製糖工場設立を画策、大里地区を流れる大川の豊富な水とアジアに近い立地を考え、1904 年 10 月門司大里の地に工場を建設した。これが鈴木商店飛躍のきっかけとなる。

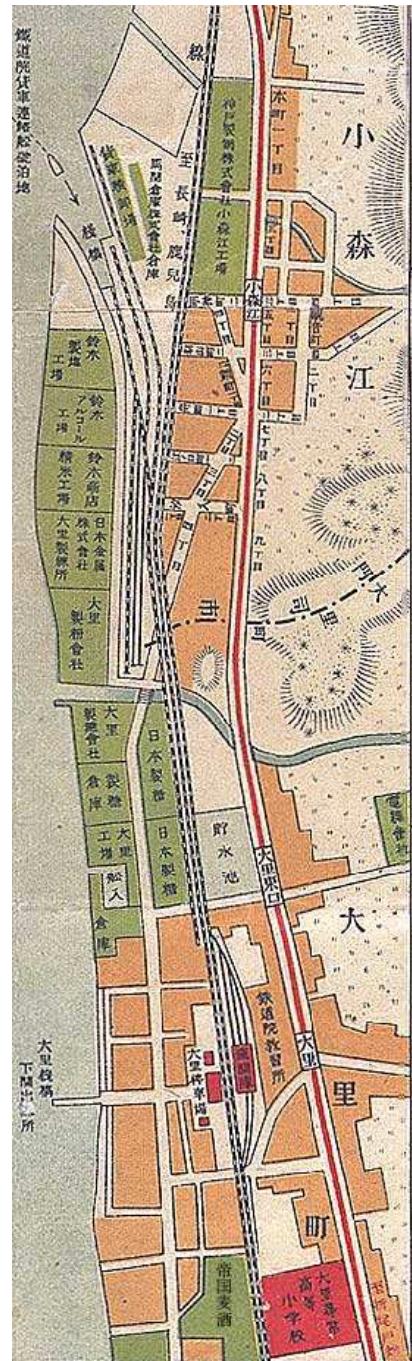
1904 年 10 月、日本初の臨海製糖工場と言える大里精糖所を設立。金子直吉が泊まり込み工場を軌道に乗せる。この工場はライバル会社に脅威として恐れられ、大日本製糖設立後工場は 650 万円で買収（1907 年）される。この際の余剰金を元手にして、鈴木商店はここ大里の地に一大穀物工場群を建設した。

建設時の 3 倍近い金額でこの工場を売却した鈴木商店は、別表に掲げる工場群を次々と建設。現在も多くの稼働を続ける食品工業コンビナートを形成した。後には神戸製鋼所や東邦金属などの金属工業にも進出、また対岸の彦島にもクロード式窒素工業（現在の下関三井化学）など多くの工場を建設し、関門海峡を挟んだ両岸の地がものづくり産業日本の一翼を担った。

（2）関門海峡の両岸に遺る鈴木商店の足跡

鈴木商店の栄華を伝える施設は全国各地に遺る。関門海峡を挟んだ大里・彦島の両岸にある赤煉瓦造の建物群のほとんどは鈴木商店が作ったものであるし、山口県側に立地する帝人（岩国に工場）、神戸製鋼所（長府に工場）、さらにはサンデン交通も鈴木商店の支援がなければ存在しなかつたであろう企業である。

兵庫県相生市の I H I（旧播磨造船所）構内には鈴木商店のマークが遺った赤煉瓦施設が現存し、神戸市内には、薄荷を取り扱う「鈴木薄荷株式会社」が、かつてのカネタツマークを社章として伝えている。「お家さん」のDNAは今もこれら企業に息づいている。



大里地区の鈴木商店工場群（大正 8）

4. 鈴木商店の炭鉱事業～君臨すれども統治せず～

鈴木商店が商社として成長をする中で、エネルギーとしての石炭を持つことは重要な事業であった。「第一次欧州戦争の結果我国の生産工業界が急激に大発展をなし、鈴木商店の関係会社の資源補給上からも金属鉱と石炭の開発には着手せざるを得なくなつたのである」（金子三次郎）

帝国炭業の創業（1915）：筑豊における石炭事業を担う会社として、当初は神ノ浦炭坑と大徳炭坑を、後に台湾銀行の斡旋により、福岡鉱業を合併。しかしながら、経営と炭坑支配人の分業体制から、大徳・神ノ浦炭坑は中島徳松が、福岡炭坑は高崎勝文がそれぞれ管理し、直接の経営とならなかった。←大倉鉱業の直接・間接的関与（福岡・宇部）

1927年鈴木商店倒産後、石炭事業はそれぞれの支配人が直接経営し、独自の道を歩む。

表 帝国炭業に関する簡易年表

西暦	地域(郡)	出来事
1887		福岡県告示、御徳地区他 110 余カ村を海軍予備炭田に仮定、試掘借区の出願差止め。
1889		海軍予備炭田地を除き田川郡・嘉麻郡の予備炭田一部開放
1890		木屋瀬地区北の浦炭鉱（後の木屋瀬炭鉱）開坑
1891		3月2日、新原・御徳地区を除く全ての予備炭田解放（堀三太郎が支配人）
1899	嘉穂	10月、八幡製鐵所により、高雄炭坑及び潤野炭坑（広岡系）買収、二瀬炭坑へ
1912	鞍手	9.21 御徳海軍炭鉱、堀三太郎に 10,900 円で払下げ。12.1 堀礦業（株）設立。
1913	（福岡）	福岡鉱業（西新町炭坑、鳥飼炭坑を経営）設立。大倉組系の資本。
1914	嘉穂 (穂波村)	鈴木商店、飯塚の蔵内次郎作鉱区を譲り受け、飯塚市平恒に大徳炭坑、神ノ浦炭坑を直接経営。後に中島徳松が支配人となり、帝国炭業神ノ浦炭坑へ。
1915	嘉穂	7月、帝国炭業創立。神ノ浦炭坑の鉱業権は帝国炭業へ。
1916	（宇部）	鈴木商店、宇部の鉱業主等と沖見初炭鉱設立（1927年大倉鉱業、後宇部興産へ）。
1918	嘉穂 鞍手	神ノ浦炭坑、16～20万トン出炭の中規模坑に成長。
1919	鞍手 嘉穂 (山田村)	山本唯三郎の経営に移った福岡鉱業、木屋瀬採炭を買収、木屋瀬炭坑を経営。
1921	田川 嘉穂 鞍手	堀鉱業、御徳炭鉱（御徳炭坑・鴻ノ巣炭坑）に経営譲渡。のち帝国炭業支配下へ。
1922	嘉穂	帝国炭業、中山田炭坑の経営に着手。野上辰之助が 1922 から個人経営として関与（1927年から野上鉱業（資）へ）。開発を進め 1925 年には山田炭坑を開発。
1923	（佐世保）	起業（行）小松炭坑、中元寺川増水に伴う坑内浸水で重大災害。坑夫 1400 名解雇。
1925	（福岡）	大徳炭坑（神ノ浦炭坑も？）、中島徳松が譲り受ける形で中島鉱業（株）設立。
1927	—	福岡鉱業、鞍手軽便鉄道が帝国炭業と合併。福岡・木屋瀬・咸興炭鉱が鈴木系に。
		中島鉱業、飯塚炭鉱（大徳・神ノ浦）の経営を三菱鉱業に委託。
		東松浦郡中里村にて、中里炭鉱開削。帝国炭業が関与（のち東亜鉱業）。
		台湾銀行管理下で整理中の帝国炭業、支配人の高崎に旧福岡炭鉱の鉱業権を移譲。
		鈴木商店倒産、帝国炭業は台湾銀行支配下に。

参考文献：金子三次郎「帝国炭業株式会社のこと」1962 ／ 『筑豊近代化大年表』（明治編）、（大正編）、（昭和戦前編）、近畿大学九州工学部図書館地域資料室 ／ 松岡高弘、川上秀人「旧炭鉱主堀三太郎について」[近畿大学九州工学部研究報告小(理工学編)]25号、1996 ／ 永江眞夫「大正期「早良炭田」における炭鉱業—福岡炭坑の事例—」[福岡大学経済学論叢]58巻3-4号、pp.99-174、2014 ／ 三浦壯「沖見初炭鉱の創立と展開について：鈴木商店から大倉鉱業、東見初炭鉱への経営権移譲を中心として」[エネルギー史研究：石炭を中心として]33号、pp.25-73、九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門、2018



図 筑豊炭山位置略図（主要駅及び鈴木商店・帝国炭業に関連する炭坑を追加）

（『筑豊石炭興業要覧』（1910）より、市原加筆）